官営富岡製糸所長・速水堅曹をめぐる人々

～明治黎明期の起業家　清水宗徳の足跡をたどる～

さいたま絹文化研究会　**藤井　美登利**

１　研究の実施状況

（１）　研究期間　　2020年７月～12月
（２）　実施場所　埼玉県狭山市・川越市・群馬県伊勢崎市・前橋市
（３）　参加人数　１名
（４）　研究内容　聞き取り・見学・調査

２　研究の成果

①　国会図書館にて清水宗徳が前橋藩農兵隊の隊長を務めていたことを記す新しい資料を発見した。松山陣屋で訓練を受け、馬事にかかわったとの記載があった。今まで、元前橋藩士で富岡製糸場の場長を務めた速水堅曹との出会いは、前橋の関根製糸場に清水が伝習に行ったという、ところからの記録しかなかった。速水は前橋藩の農兵隊（郷兵）の取りまとめ役であったので、２人は製糸所を始める前から、前橋藩時代からの知り合いであった可能性がある。
②　狭山市にて清水の子孫、山口氏に聞き取り調査ができた。清水家は宗徳の３代前から苗字帯刀の名主の家柄で、清水がサムライ姿で写した写真が残ること、川越藩（前橋藩）のお台場の警備に行っていたことが聞き取り調査で判明した。また、前橋藩営製糸所の責任者の深沢は松山陣屋の作事奉行であり、深沢とも出会っていた可能性もある。
③　清水は速水の生糸直輸出会社「同伸社」の取締役になるが、同伸社のシステムを埼玉県でも取り入れ、清水配下の小規模の器械製糸所を連携させ、品質を統一させて銀行融資も共同で受ける「暢業会社」を始めた。製品は同伸社を通して直輸出をするシステムを広めた。
④　国会図書館にて「日本蚕業雑誌38号」の中に、清水の論文「生糸貿易上改良の私見」を発見。10ページにわたり、数字を交えて横浜外国商の手数料、売込問屋の手数料、直輸出の場合の経費などを示している。
⑤　伊勢崎市境島村にて幕末明治の蚕種輸出蚕業、養蚕伝習所についての知見を深めた。

……

【別添報告書】

官営富岡製糸所長・速水堅曹をめぐる人々

はじめに

埼玉県の蚕糸業について『埼玉県蚕糸業史』によると・・・
「本県に於いては明治２年旧川越藩主（当時前橋藩主）松平大和守が維新後の農業状態に必ず一大動を来すことを予想し、農家の副業的施設に必要であることを認め、前橋転封後も引き続いて領有した比企郡下の村々に蚕業を奨励すると共に、三保谷村鈴木久兵衛に開拓山林勧農付属を命じ、桑苗15万本を群馬県下より取り寄せ、松山、中山、井草、出丸などの各町村に貸下げ、植え付け教師を派遣してその栽培の実地指導をなさしめたと伝わる。」

上記の地域は現在の埼玉県川島町（川越市に隣接）であり、この地域には明治10年に製糸会社「川洲精糸会社」が設立され、旧前橋藩士の速水堅曹、速水の兄の桑嶋新平、藩営前橋製糸所の責任者の深沢雄象らが設立した前橋の研業社に伝習に行き、交流をしている。開館式には前橋から旧藩士栗間氏が招かれ祝辞を読み、当会社で作った生糸は全て前橋におくり、研業社を通して直輸出をする旨の記録が『川島町史』に記載されている。

本稿ではこの件には言及しないが、前橋藩と旧領地とのかかわりが製糸業を通してもみられる。このことは、埼玉県初の器械製糸所を開いた狭山市の清水宗徳の場合にもみられる。調査の過程で清水が前橋藩（川越藩）

の農兵隊（郷兵）の隊長として松山陣屋で活動していたこと、川越藩のお台場の警備にも参加していたことがわかった（別稿で紹介する）。また、速水と桑嶋は前橋藩の郷兵募集の担当者であった。

本稿のテーマは埼玉県初の器械製糸所を開いた清水宗徳と、日本初の器械製糸の前橋藩営器械製糸所を立ち上げ、後に官営富岡製糸場の所長を務めた速水堅曹らの関わりを明らかにすることである。速水堅曹の功績については先行研究があるため、清水宗徳の活動をたどることで、速水たちから得た先進的な活動（器械製糸・生糸直輸出など）を、高麗・入間郡（埼玉県西部）で清水がどのように展開していったかを提示したい。

なお本稿は『新編埼玉県史』、『埼玉県蚕糸業史』、『狭山市史近代資料編』、『狭山市史通史編Ⅱ』、『川越市史近代編』、『速水堅曹資料集』、『清水宗徳翁小伝』、『明治立志編』、『製糸の都市前橋を築いた人々』『前橋市史第２巻』に多くを拠っている。

１）清水宗徳の経歴

天保14年（1843）、武蔵国高麗郡水富村大字上広瀬に生まれる（現在の埼玉県狭山市）。清水家は武蔵国高麗郡上広瀬村の世襲名主を勤める傍ら、広瀬神社の神官を兼ねる家柄で村内屈指の高持百姓であった。また、宗徳の子孫山口氏によると、宗徳の祖父の代より川越藩から苗字帯刀を許された。宗徳は幼少より利発で国学と漢学、和歌を修める。文久３年（1863）、村内の有力者下邑泰作の娘せき子と結婚、長男と次男をもうけ、同年20歳の若さで父の跡を継いで名主となる。慶応３年（1867）、24歳で19カ村の名主取締役に、明治維新後は戸長兼民事取締役及び開拓勧農掛に任命される。

また、『明治立志編』によると慶応２年（1866）、23歳の時に前橋藩主の命により武州松山の陣屋にて兵術を学び農兵隊（郷兵）の隊長となったこと、また、時期は不明であるがお台場の警備に出仕したことが判明した。（山口氏談）

明治10年（1877）、埼玉県で初めての器械製糸工場を上広瀬に設立した。その後、県会議員、第１回衆議院議員にも当選しており、川越鉄道（現在の西武新宿線、国分寺線・国分寺―本川越間）の発起人、酪農、馬車鉄道、砂利採掘など狭山市の殖産興業に尽力した。現在は狭山市の偉人として、狭山市立博物館に資料が展示されており、清水の墓所は狭山市指定文化財になっている。別稿にて清水の伝記『清水宗徳翁小伝』を発行し、馬車鉄道に勤務していた沼崎氏の子孫の聞き取りも行った。

２）埼玉県初の器械製糸所「暢業社」ができるまで～明治初期の埼玉県の蚕糸業をめぐる動き

安政期の開港により、日本の代表的な輸出品となった生糸と蚕種の輸出は明治維新後も発展した。しかし、欧州で流行していた蚕病が下火になったこともあり、蚕種の輸出は明治６、７年頃をピークに以降衰退し、明治10年代以降は生糸輸出の時代となる。埼玉県は全国有数の蚕種地帯として活況を呈し、深谷には蚕卵原紙売捌所が設けられた。また、埼玉県令白根多助（元長州藩士）は殖産興業を推進し、清水宗徳の活動にも理解を示した。

一方、生糸の品質向上を図るため、明治６年、羽生町、加須町、行田町、草加宿の４カ所に生糸改会社が設けられ、国内向け、輸出向け問わず、生糸には製造人の押印がなければ売買できないことになった。生糸取引制度の整備もさることながら、製糸技術の向上に、より重点がおかれた。そこで埼玉県は、同じく明治６年に、官営の富岡製糸場にならって、製糸館を建設すべきだと各町村に説諭している。なお、製糸技術習得のため、埼玉県からは尾高惇忠の娘、勇以下235人の女性が富岡製糸場へ伝習に行っている。伝習を終えた彼女たちの帰郷によって、埼玉県内の製糸技術は進展することとなった。清水宗徳が開設した埼玉で初めての器械製糸所にも８名の富岡伝習工女が雇用されている。

大里村胄山（熊谷市）の名主、豪農の根岸武香は、尾高惇忠から工女が集まらないという手紙をもらい、14歳の娘のり子を明治６年４月から９月まで富岡へ派遣した。のり子はお付きの女中３名とともに富岡へ行き、５カ月勤務した。お付きの女中はそのまま工女として残ったという。小川町の青木テルも尾高の名主つながりで富岡へ女工として行っており、当時の武州の名主ネットワーク（主に縁戚つながり）の存在は興味深い。根岸家は幕末の薩英戦争の際に通訳を務めた清水卯三郎の母の実家であり、卯三郎の依頼で薩摩藩から追われていた五代友厚と寺島宗則（後の神奈川県知事）を匿った（縁戚の名主吉田家が主に関わっていた）。根岸家は造り酒屋や武道の道場も運営しており、長州藩と商取引があり、藩士時代の楫取素彦も滞在し手紙も残されている。後に根岸武香は群馬県令になった楫取素彦を前橋に訪問している。五代は富岡製糸場長となった速水と親交を重ねた人物であり、速水の日記には内密な話を相談という記述が多々出てくる。五代は大阪で製藍所を設立するが、一時期潜伏をした武州羽生の清水卯三郎の実家は、藍の盛んな地域であった。五代と寺島の武州

潜伏時の話はあまり知られておらず、根岸家にはそれを語る資料が残されているため、今後、より詳細な調査が待たれる。また、根岸家は甲府の生糸商雨宮家、川越の安斎・北野家とも縁戚で、互いの事業に出資していた様子がうかがえる（横浜の生糸商茂木商店の支配人・桐生の織物商書上家とも縁戚）（根岸友憲さん聞き取り　2020年９月）。

さて、明治９年前後には埼玉県蚕糸業に新しい動きがあった。埼玉県で初めての器械製糸工場「暢業社」が高麗郡上広瀬の清水宗徳により開設されたのである。入間川をはさんで隣接する百数十ケ村は、県内有数の養蚕地帯であったが、製糸業は未発展であり、産繭の大部分は上州や八王子の商人に買いたたかれて郡外に売られていた。県北地方でも、明治10年頃に蚕種から製糸への転換がはじまっていた。

３）清水宗徳、埼玉で初めての器械製糸を設立

明治10年（1877）５月、埼玉県初の器械製糸工場、暢業社が上広瀬村（狭山市）の豪農清水宗徳ほか14名により設立された。

清水は名主時代の慶応２年（1866）に前橋藩の農兵（郷兵）となり、松山陣屋で馬事を扱う隊にいた（『明治立志編』）。清水の子孫の山口氏によると、お台場の警備にも前橋藩士として携わっていたという。速水堅曹は郷兵とりたての担当でもあり、桑嶋新平、深沢雄象ら藩営前橋製糸所、その後の研業社関根製糸場を設立した元前橋藩士たちとは郷兵時代に知り合った可能性が否定できない。特に桑嶋新平は前橋藩の馬医であったので松山陣屋の馬事を担当することもあったかもしれない。清水は名主時代の明治３年（1870）、村有の入間川付近の荒れ地を拓いて桑の栽培を奨励し、住民に桑の苗を与えて培植させた。明治８年には養蚕室を設けて模範飼育法を施し、近隣有志の参考にさせて見習い生を募集してそれを習熟させた。

製糸にも早い段階から興味をもっており、明治９年には自ら工人を率いて富岡製糸場、前橋、伊勢崎の製糸場数カ所を視察し、建物、設置器械について研究した。その一方で、妻のせき子を含む婦女５名を速水･桑嶋･深沢ら元前橋藩士が設立した勢多郡（前橋市）の研業社・関根製糸場に送り、器械製糸の技術を習得させている。また、名前は不明だが、開業にあたり富岡製糸場で伝習済の工女８名を雇用している。

妻のせき子は地域の有力地主下邑泰作の娘で、下邑泰作もこの事業に出資している。

速水堅曹の残した明治９年９月26日の日記には、「武州の清水宗徳の一族が関根に来て伝習中である」という記載がある。すでにこの時関根製糸場は、工女40名を擁する80人繰りの器械製糸場であり、富岡製糸場に次ぐ優れた製糸工場として知られていた。前述したように、清水と速水、桑嶋、深沢らはすでに前橋藩・農兵時代に知遇を得ていた可能性がある。

速水堅曹研究家である速水美智子さんの談によれば、この伝習中、速水は米国での博覧会に製糸担当として出張していたので、清水とは会ってはいないが、桑嶋は研業社の回顧録に清水の暢業社の生糸の受賞歴を誇らしげに記録しているという。また、名前の暢業社は、研業社に敬意を払いつけた名前だという。「暢」という字には伸びていくという意味がある。

清水の工場は、入間川左岸に近い上広瀬村字河原宿に建設された。開業に先立つ明治10年８月には、清水の製糸の師である速水堅曹が滋賀県の製糸人を連れて視察に来ている。当時清水は33歳、速水の４歳年下である。前橋藩郷兵時代からお世話になっていた速水に、自慢の工場を見てもらい、前橋に伝習に行った妻せき子ともども速水一行を出迎えた清水は、どのような気持ちで迎えたのだろうか。地域の雇用もうみ、新しい産業に夢も膨らんでいたことであろう。

明治10年10月、埼玉県勧業課は職員を派遣してこの工場を視察させている。以下『狭山市史通史』にて紹介された視察報告書「広瀬製糸場景況之儀上申」概要より引用する。

① 明治９年より工事を始める。千坪の敷地（河原宿）に六間（約11m）に十間（約18.２m）の製糸場を建設。設備が行き届いた施設である。

② 水車小屋は二間（３.６m）に二間半（４・６m）の建物。水車は動力として重要であるばかりでなく、「水揚之器」をこれにセットすることにより、水田用、製糸用の水と蒸気罐用の水の確保に役立っている。

③ 蒸気釜は群馬県前橋の職人に注文し、すべて納品済み。釜の直径は約80ｃｍ、釜は非常に堅固にできており、レンガで積み立てられている。レンガは上広瀬の者が焼いたが品質はあまりよくない。

④ 煙は通常は煙突からそのまま吐き出されるが、この工場では地中９ｍの溝中を通り、高さ13mの煙突からでるように設計されている。レンガの積み立ては前橋の職人である松本吉五郎に依頼した。

⑤ 普通鉄製である製糸器械の大小摺輪とその他の小道具は、狭山笹井の大工の田中正三郎に依頼し、富岡、関根両製糸場の器械を模造させて全て木製とした。ただし、車軸のみは鉄製とした。

⑥ 煮繭用の鍋は、比企郡松山（東松山市）の横田次郎吉が製造し一組一円で整備した。

⑦　製糸器械は両側に30人分を設置。１名の工女に１名の手伝い人をつけるので、工女は全体で60名となり、この他に周旋方３- ４名を置くことにしている。工女は富岡製糸場伝習済の者８名、関根製糸場伝習済の者５名のほか、村内の者30名を雇用。繭の取り上げ量は一日２石を見積もっている。

暢業社の器械と施設は、当時としては画期的なものであった。埼玉県令の白根多助は、開業にあたり祝辞を寄せており、模範工場として賞賛し、内務省にも埼玉初の器械製糸工場のことを報告している。

では、その暢業社はどのように運営されていたのだろうか。以下『狭山市史通史編Ⅱ』から、暢業社の運営・経営状況をみていきたい。

明治12年９月に生糸買い付けのために同社を訪れたフランス人シャモナールらに対して清水は、「関根製糸場の器械を模倣したとはいっても、蒸気罐やその運転方法などは大いに異なるところがある」と、自ら語っている。同社の器械とその他の施設は彼が独自に改良、工夫したものだった。清水は後に鉄工所を狭山に興すが、その萌芽をうかがわせる記述である。

工場の建設や付属施設の整備に要した金額は5453円にのぼる。これに運転資金を加えると、同社は多額の資金を要したとみられるが、その資金の多くは内務省勧業資本金からの借り入れだった。明治９年には清水名義で、勧業資金のうち千円を３カ年据え置きという条件で県に願い出で、さらに翌10年５月には設立発起人の連名で６千円相当の不動産を抵当に無利息５カ年賦で５千円を借り受けている。

暢業社製の生糸は、富岡製糸場や福島県の二本松製糸場の生糸と共に、優等品「武州産出之生糸稀ナル品位之趣」として横浜の外国商館から高い評価を受け、高値で取引されたという（『埼玉県行政文書』明1509）。明治11年にイタリア人デローロに販売した生糸は、100斤（約60kg）につき洋銀690枚を受け取り、この年の最高値を得たとある。その結果、同社は創業後７カ月にして収入4897円、支出4584円、差し引き314円の利益を計上できるようになった。さらに、翌12年12月には、外商側の希望によって向こう１カ年間の「製糸高見積売買約定」が取り交わされ、これに対応するために80人取りの器械の増設を始めた。暢業社が器械増設に踏み切った理由は、たとえ優等な生糸を作っても数量がわずかだと、外商はそれを優等品に加えないためであった。当時は１万斤（約６トン）以上の製品を製造しないと、高値を維持できないのが実情だった。

清水が開設した、埼玉県初の器械製糸工場は順調に発展するかにみえた。だが、明治10年の大暴風雨によって、工場設備が大きく破損するという被害を受けてしまう。その後、工場その他の施設は同年11月までに復旧し、操業が再開されたが、その１年後の９月に、同社はまたしても大洪水に見舞われ、約千円相当の大損害をこうむった。器械の増設や自然災害が重なり、同社の資金繰りは困難になり、勧業資金返納残金５千円は、返済の目途が立たなくなり、返済内容の変更などが相次いだ。返済の延期や10カ年の返済願いを出したが、この願いは当局から拒否された、と『狭山市史通史Ⅱ』には記されている。

しかし、その間も清水は限られた施設で高品質の生糸を生産し続けていた。明治12年の第１回共進会では２等を受賞し、14年の７県連合共進会では１等、明治18年の共進会では２等を受賞している。狭山市上広瀬にある広瀬神社には大正３年に作られた清水の顕彰碑があり、そこには共進会等で12回以上１等、２等を受賞していると記されている。

４）速水堅曹の呼びかけで生糸直輸出の「同伸会社」を設立

明治12年11月、横浜で日本で初めての繭生糸共進会が開催された。審査部長は速水堅曹がつとめ全国の製糸家10人が審査を担当し、清水も埼玉でただ一人選ばれ、日本を代表する製糸家のひとりとなった。また、この年に埼玉県議会議員にもなっている。

速水は共進会終了後の東京向島の八百松楼での親睦会で、外国商館の商権独占に対抗するため生糸直輸出会社「同伸会社」の設立を呼びかけた。もう政府に頼るのはやめ、『朋は類を以って聚る』という言葉を信じて皆で団結しようという速水の気迫のこもった演説を聞き、清水も共感したにちがいない。すでに暢業社には外国人バイヤーが来ており、また、いくら良質な生糸を作っても量がまとまらないと買いたたかれることは経験済みであった。清水も同伸会社設立準備のために奔走したという。翌年、同伸会社が設立され、社長は速水、副社長はニューヨーク総領事だった高木三郎を迎え、清水も取締役として名を連ねた。翌明治14年にはフランス・リヨンに支店を出し、富岡製糸場と清水の暢業社などの生糸を欧州に直輸出をした。埼玉県初の器械製糸所、洪水や台風の被害からの回復もままならず、自転車操業状態であった暢業社の生糸が、官営の大工場であった富岡製糸場の生糸と同等に扱われ、選ばれたのである。清水と妻のせき子、工女たちの喜びはいくばくかであったろう。この事実はもっと知られるべきことである。同伸会社は、狭山茶をアメリカへ直輸出していた佐藤百太郎との縁もあり、開業後２年足らずで売上額は在ニューヨーク生糸直輸出商の最大手であった貿易商会を追い抜いた。清水の暢業社は、同伸会社の生糸直輸出を支えた製糸所のひとつであったといえよう。そして

清水は、速水が同伸会社で各地の製糸家をまとめたように、埼玉県内の製糸家を集結させた「暢業会社」の設立へと動くのである。

５）清水のリーダーシップ、製糸家を結集させ～「暢業会社」の設立へ

前掲『狭山市史通史編Ⅱ』によれば、暢業社の生糸が、外国商館によって富岡製糸場や二本松製糸に次ぐ高い評価を受けて取引されたことに刺激され、明治10年代初頭には埼玉県では器械製糸場が相次いで開設された。高麗郡飯能村の飯能製糸場、同郡大河原村の大河原製糸、飯能直竹村の直竹製糸、長沢製糸、入間郡小室村（川越市）の小室製糸、鴻巣の糠田製糸と第二工場、吹上町の小谷製糸、大里郡（熊谷）の村岡製糸などである。これらの器械製糸場は、いずれも清水の暢業社と連携していた。高麗郡が多いのは入間川沿いの村々で、動力として水力が利用出来たことが挙げられる。工場の規模は、暢業社の80人繰を別とすれば、40人繰２工場、24人繰５工場であり、概して零細であった。

一方、川越では座繰り製糸を開設した西沢慎吉が、明治15年には工場10カ所、工女数1550名を雇用していた。清水の器械製糸の暢業社と川越の西沢の座繰り製糸、武陽社の設立により、入間・高麗地方の生糸生産高は急増し、明治14年以降は埼玉県生産額の５割以上を占めるまでになった。その結果、八王子商人や上州商人によって生繭が一方的に買いたたかれることはなくなった。しかし、この入間・高麗地方の製糸家は資金に乏しく、横浜生糸売込問屋による無担保前貸し金融や、これを前提とした地方銀行からの融資も受けられなかった。そのため、原料繭の一括購入ができず、一荷の製糸を売って、一荷の繭を買うという自転車操業を余儀なくされたと、『狭山市史通史編Ⅱ』 はその苦境を伝えている。

明治11年、清水が学んだ前橋の研業社・関根製糸場の深沢雄象、共進会で審査員として清水と共に関わった星野長太郎らは、その研業社と、改良座繰り工場を経営する士族製糸家たちとを結集させ、生糸の製品検査と統一荷造を行う「精糸原社」を発足させた（『製糸の都市前橋を築いた人々』）。清水は当然、前橋のこの動きを知っていたであろう。このやり方を参考に、明治13年５月、清水は入間郡内の製糸家を結集して、川越町の第85国立銀行内に「暢業会社」を設立した。清水の暢業会社の目的は「各製糸場の生糸を一種同一に改良し、輸出販売の道を拡充する」ことであった。具体的には生糸検査と製糸家への資金の融資である。前橋の器械製糸の「研業社」、改良座繰りの「精糸原社」がともに連携して、生糸を同伸社経由で直輸出をするというモデルを、清水は自身の「暢業社」関連の器械製糸工場と改良座繰りの川越「武陽社」西沢慎吉とを連携させた「暢業会社」を立ち上げた。2019年には横浜開港資料館蔵の「暢業会社」の生糸商標が発見された。この商標には明治18年の共進会２等受賞と記載されているので18年までは生糸を「暢業会社」として輸出していたことがわかる。（詳細は「さいたま絹文化研究会通信21号」を参照）

暢業会社は、輸出生糸の改良と統一、販路の拡張、荷為替金の確保を通じて入間・高麗地方の生糸輸出に大きく貢献した。前述の精糸原社における前橋モデルが暢業会社に導入された背景には、速水堅曹、星野長太郎らとの清水の交流と、清水のリーダーシップが寄与していたであろう。

しかし、以上の革新性とは裏腹に、同社の経営は運転資金にも事欠くほど困難だった。直輸出は横浜売り（仲買い商、外国商館を通す）に比べて一俵について平均30 ～ 40円、ときには50 ～ 60円の純益があった。しかし４カ月を経過しなければ資金の回収ができず、また、保険料、船賃、手数料などに100円を要し、その結果として出荷のたびに千円～２千円の不足が生じたため、資金の乏しい製糸家にとっては、かえって経営を圧迫する要因ともなっていた。

一方、暢業会社とは別に、明治14年１月に生糸改正会社が設立された。この会社は暢業会社とは異なり、埼玉県令白根多助の指導により組織された直輸出会社であった。白根は県下の製糸家に対して、「製糸家団結協議案」を提示し、同伸会社を通して生糸直輸出に関する方策を協議させた。埼玉県下の器械製糸と座繰り製糸所を結集させ、清水が取締役をも兼ねる生糸直輸出会社である同伸会社を通じて県産出の生糸をまるごとニューヨークに直輸出し、商権の回復を図るという県令白根の直輸出構想が、ここに実現された。それは、清水の構想を踏まえ、さらにそれを全県的な規模に拡大したものであったと『狭山市史通史編Ⅱ』は伝える。

さらに『市史』によれば、器械製糸場や座繰製糸場の続出と、これを基盤とする全県的な規模での直輸出の体制の整備は、入間・高麗両郡を中心とする埼玉県製糸業の躍進を確約するかにみえた。だが、明治15年に始まるアメリカの恐慌と、松方デフレ政策下の深刻な不況は、直輸出そのものの不利性や政府の直輸出政策の転換とあいまって、こうした期待を打ち砕いた。清水の暢業社製糸の高値に触発されて相次いで設立にされた多くの高麗･入間郡の製糸所は、そのほとんどが松方デフレ政策のあおりを受けて倒産を余儀なくされたという。

埼玉県初の本格的な器械製糸場として知られた暢業社も、明治22年６月には東京の米倉一平の手に渡った。米倉は東京米穀商取引所を設立し、甲武鉄道の役員も務める薩摩閥の実業家で、明治初期には松方正義の元で

勧農掛として働いていた。清水が設立発起人のひとりとして奔走した川越鉄道（川越―国分寺間）の出資者でもあった。清水は製糸を横浜へ輸送するための鉄道の必要性も考えており、甲武鉄道とつながることで川越鉄道を実現させた。川越鉄道の株主には横浜への生糸輸出関連で知己になったと思われる三井物産横浜支店長の馬越恭平なども名を連ね、甲武鉄道の社長の雨宮敬二郎が筆頭株主であった。清水は鉄道が敷設される東村山、所沢、狭山、飯能などの有力者に声をかけ、少数の大株主よりも沿線のひとが多く株主になることを心掛けたという。製糸所は米倉に渡ったが、米倉は清水と同じく第１回衆議院議員に当選しており、川越鉄道の発起人の一人で、交流があったと思われる。暢業社を引き継いだ米倉製糸は最盛期は200釜まで増やし、その後所有者を幾度か変えたが、工場は戦後まで繊維関連工場として存在していた。現在、その跡地はヤオコー狭山店になっている。

６）松方デフレ以降の取り組み～養蚕組合・蚕種業へ

『狭山市史通史編Ⅱ』 によると、松方デフレまでの入間郡内の製糸業を支えた基盤の一つは、入間・高麗地方における養蚕業の発展であった。埼玉県はその地理的条件とともに、渋沢宗助、尾高惇忠（初代富岡製糸場場長）、木村九蔵（児玉の競進社養蚕学校設立）らの活躍もあり、開港後、全国屈指の養蚕県に成長した。明治23年には桑園面積で全国５位、収繭量で第４位の位置を維持し続けた。ちなみに激減しているが、2019年現在も全国４位である。埼玉県の養蚕業を支えたのは秩父・大里の両郡とともに、入間・高麗の２郡であった。入間郡の入間川南部は土地が肥沃で各種桑苗がよく育ったこと、また、夏蚕、秋蚕にも取り組んだことが挙げられる。入間・高麗地方の養蚕業は順調に伸びたが、唯一の弱点は養蚕業の基礎ともいうべき蚕種の自給ができないことであった。開港後の埼玉県は、屈指の蚕種生産地であり、明治10年代初頭までは、蚕糸類のなかでは蚕種輸出が主流をしめていたが、その後徐々に蚕種輸出が衰退すると、国内向けの粗悪な蚕種が埼玉県産蚕種に増加した。さらに入間郡の場合、こうした傾向は特に著しく、明治12年の埼玉県郡別蚕種生産高において、入間郡の蚕繭の生産は埼玉県産額の20%をしめる一方で、蚕卵紙数では県産額のわずか２．７％にしかすぎなかった。さらに、入間郡内で消費される蚕種は他府県の品が五分の四以上をしめていたという。

以上の実態からも明らかなように、蚕種の改良と品質統一は重大な課題であったのだ。この課題に危機感を抱き、その解決に心血を注いだのも、清水宗徳であった。『狭山市史通史Ⅱ』によれば、名主時代の明治３年27歳の時から村有地の荒れ地を拓いて桑の栽培を奨励し、８年には養蚕室を設けて模範飼育法を施し、見習い生を募集しそれを習熟させた。村内の青年を農商務省蚕病試験所へ入所させ伝習させ、明治19年には「蚕病予防所設立の建白書」を埼玉県令吉田清英に出している（『新編埼玉県史資料編21-59』）。その中で清水は、共進会で生糸を出品した際に繭の審査も見たが、埼玉県産の繭が下等であること、良い生糸は良い繭がないと生産できないこと、養蚕農家の蚕病への知識の欠如などを憂い、フランス、イタリアでも条例を作り蚕病を防ぐための方策をとっていることを述べている。蚕病予防費として地方税から３千円を支出し、各郡に１カ所づつ蚕病予防所を設置するよう要望している。この建白書にはイタリアパトワ府養蚕実験規則の公布、養蚕監導局設置規則の翻訳書も添えているのである。清水は川越蚕糸業組合の組長にも就任したが、その報酬を組合に寄付し、顕微鏡数台を求め教師を雇い、微粒子病の研究を行い、蚕病予防の方法を講じた（『清水宗徳翁小伝』） 。

さらに、清水は、明治18年からは内国勧業博覧会の審査員にもなっている。清水のこうした献身的な活動を背景とし、明治23年には上広瀬に公業館合同飼育養蚕所が設立された。この施設では、地質と桑の種類を選び、供桑を合同で行って養蚕にあたり、県内の蚕種を改良して一定の品質にすることを目的としていた。330坪の養蚕室と蚕種貯蔵庫などの施設を持つ当時としては堂々たる養蚕所であった。役員である幹事を、蚕業実務経験者に限定したという点については、清水の示唆によるものであろうと『狭山市史通史編Ⅱ』は述べている。この設立の同年に、清水は第１回衆議院議員に当選し（47歳）、国会議員として活躍する。同選挙区には東京専門学校を設立した高田早苗（31歳）もいた。

それと並行して清水は広瀬地方の特産品の織物・広瀬斜子織の組合も作り、製品の質の向上に努めるように織元の意識を高めた。清水は故郷の織物が「川越斜子」と呼ばれて三越や大丸で売られていることを憂い、ふるさとの織物、「広瀬斜子織」の名を高めたいという意識に基づくものであったという。明治26年にはアメリカ・シカゴの博覧会に広瀬斜子織を出展し、名誉賞を受賞している。これも海外に臆せず出ていく、清水の生糸直輸出の経験がいきたといえるであろう。

以上のように、自己の利益のみにとらわれず、地域の産業発達のための貢献へと清水を突き動かしたものは何であったのか、それをうかがわせる一文を引用したい。同伸会社を通して暢業会社の生糸を直輸出することは理念としては素晴らしいことであるが、運営資金の調達には弱小製糸場の多かった入間・高麗地方を束ねていた清水は、かなり苦労をしていたようである。その点に関して、『清水宗徳翁小伝』は以下のように述べている。

長文ではあるが、清水の決意と熱意がわかる重要な描写であるため、最後に引用したい。

「当時、翁（清水）は蚕糸業者二十一家よりなれる暢業社の長となり、且つ、埼玉県所産の生糸を直輸出する改正会社の長も兼ねていた故、両社の名義のもとに、埼玉県庁より五万円、横浜正金銀行より十万円を借り入れ、各蚕糸業家が之を流用して、その事業を経営したが業務に経験少なきと時勢の利ならざるとに基因して不幸にも、皆、損敗を取って窮地に陥った。官償償還の期は刻々と迫るが、弁済すべき資金は固よりない。この絶対絶命の地に翁は二十名の同業者を率いて、県下の蚕糸業家を代表して、県庁へ出頭し、情を具して納債延期を嘆願したが許されない。翁が思ふには『今回のことは我等の死活にかかわるといふよりも、我が蚕業界の興廃に関する大問題である。もし、官の充許を得なければ、折角培養した蚕業の萌芽も、今日以降は、その余蘖すら留めないであらう。我等はその責を負いながら、何の面目あって生きながら、郷県に帰られようぞ。進退維れ谷ったからは、寧ろ、潔く官庭に割腹し、其の業の為に殉じて、且つは、官憲に謝し、且つは、県人に詫ぶるに如くはない』とかく決心して此の旨を上申し、鞘をはらって、刀を腹に擬したのである。官はその赤誠に感じ、請をいれて、遂に、年賦償還のことを聴した。これに於いて、県内十余カ所の製糸家は、辛うじて倒産の悲境を脱し、蚕業発展の基礎も固まったのである。昔の忠臣烈士が、主君のため、祖国のために一命を捧げた例は幾多、耳にしているが、実業発展のために、責を引いて自刃せんとした話は、余輩の寡聞なる、未だ、其のためしを知らない。翁は、実に、其の業のためには、其の一身を犠牲に供して顧みないのであった。その他は、推して知るべきである。」

以上で述べられた逸話は、清水が前橋藩郷兵として松山陣屋で農兵隊の隊長やお台場の警備にもついていたという事実を踏まえれば、武士としての気概を持ち、かつ蚕業界のリーダーとして自負し、周囲もそれを認めていたことがわかるものである。もちろん製糸を伝習した速水や桑嶋、深沢らの前橋「研業社」との交遊が基礎になっているであろう。清水の人間性や製糸業、直輸出にかける熱意、リーダーシップをうかがわせる描写である。

おわりに

幕末明治に生糸を国際商品として扱った人たちの行動力やネットワーク、気概などの全貌を知りたい、という思いですすめたが、彼らの思いをどれほど理解できたのであろうか。速水と清水の２人の間にも、どれだけの人がどのような密度で関わっていたものか。速水堅曹と清水宗徳は蚕糸で富国を目指す同志であった。速水の「百万の富を得ることよりも、百万の富人を増やしたい」という考えに清水も共鳴していたに違いない。また、清水が代々つづく名主であり、さらに地域の神社神官であったという責任感も、彼の行動に大きな影響を与えただろう。この責任感が、地域のために仕事を作り産業を興すということへの強い情熱の背景にあったことは確実であろう。明治23年頃の関東地方の冷害、霜害を経験し、また当時の国策である北海道開拓に共鳴した清水は、春蚕の時期に霜害がなく、蚕病もないという北海道での蚕糸業で富国に貢献するべく、本稿で述べた国会議員当選後の明治25年、次男と広瀬地域の人たちとともに北へ旅立つのである。星野長太郎、木村九蔵が札幌で桑園を貸与されていたこともきっかけだったのかもしれない。北海道『奈井江町史』には清水の北海道移住中の活動を語る資料の一部が掲載されており、清水の活動の全貌を知るには北海道での調査も欠かせないであろう。速水堅曹も北海道での蚕業指導を政府から請われていたが、上州での器械製糸を極めるために固辞していた。清水の起業は多岐にわたっており、資料も少なく不明な部分も多いいが、蚕糸業への熱意は一番強かったのではと思う。渋沢栄一や五代友厚のように全国に知られる人物ではないが、清水は蚕糸業の魁として誇るべき人物である。また、清水の活動の周囲をみるだけでも、明治前期には各地で座繰り、器械製糸を立ち上げ、蚕糸業で国を富ませようと奮闘していた名もなき人たちが多数いたということを知り得た。その意味で、清水のもとで12歳から働いていたひとを祖父にもつ沼崎氏や、コロナ禍で十分とは言えなかったが清水の子孫の山口氏に聞き取りができたことは僥倖であった。清水宗徳は明治42年（1909）、発起人となった武蔵絹織物同業組合の創立総会を見届け、同年８月に67歳で亡くなった。

参考文献

『速水堅曹資料集』速水美智子編　文生書院　2014年
『狭山市史通史Ⅱ』　狭山市　1988年
『新編埼玉県史資料編21』　埼玉県　1982年
『狭山市史近代資料編』　狭山市　1988年
『清水宗徳翁小伝』　古谷喜十郎編　沼崎栄吉発行　1914年

『川越市史第４巻近代編』　川越市　1978年
『製糸の都市前橋を築いた人々』　前橋商工会議所編　上毛新聞社　2018年
『明治新立志編』　篠田正作編　鐘美堂　1891年
『郷土の偉人清水宗徳の生涯』　権田恒夫
『前橋市史第２巻』　1973年
『飯能市史』（資料編Ｘ）　1985年

「清水宗徳翁小伝」発行者　沼崎栄吉氏子孫　聞き取り調査

清水宗徳の業績がわかる資料は「狭山市史」「埼玉県史」以外にはほとんどなく、そのなかで宗徳の没後５年に宗徳を知る人々によって発行された「清水宗徳翁小伝」（大正３年刊）はとても貴重なものといえる。今回、この小伝を発行した故・沼崎栄吉氏の孫にあたる沼崎正徳氏に聞き取りができた。また、沼崎栄吉氏は清水宗徳の自宅、牛乳搾乳場（暢業社製糸所跡地）を宗徳亡き後、人手に渡っていたものを購入し、清水宗徳の後妻の住んだ家に居住している。現在は、この建物は地域の人が集う場所として地域に公開している。今回、宗徳ゆかりの建物が当時のまま現存していることなど新たな発見があった。

「清水宗徳翁小伝」

発行者　故沼崎栄吉氏
（1887-1960）

① 発行の経緯

宗徳と関係のあった入間市豊岡の長泉寺住職・宇田川玉瑞が呼びかけ、川越中学の校歌を作詞した同校の国語教諭・古谷喜十郎が執筆。県会議員の小林拾三、衆議院議員・粕谷義三らが序文を書いている。狭山市中央図書館蔵 「狭山市史」にも掲載されている。

写真：沼崎正徳さん（昭和17年生）
2020年10月20日

宗徳の家族が住んだ家
（狭山市広瀬東）

沼崎正徳さん（1942 年生まれ　79 歳）

◆祖父は12歳で清水宗徳のもとで小僧として働き始めました

私の生まれた家は、宗徳さんと後妻さんが住んでいた家です。明治26年ごろに飯能の方から移築した家だと聞いています。祖父が、人手に渡っていた宗徳さんの牧場と家屋敷を買いました。祖父は明治20年生まれ、12歳でお茶くみの小僧として、宗徳さんが関わった入間馬車鉄道で働きはじめました。きっと一生懸命働いたのでしょう、大正２年（1913)、27歳のときに宗徳さんが立ち上げ、すでに人手に渡っていた「ジェルシー農園」を敷地、建物、乳牛、従業員も全て買い上げました。よそからお金を借りて買ったそうです。すでに宗徳さんは亡くなっていました。敷地の奥には宗徳さんの住んだ広い家がありましたが、沼崎家は後妻さんが住んでいた家に住み、目の前には馬車鉄道が通っていたそうです。奥の母屋は昭和23年頃に取り壊しました。

◆宗徳は明治18年に農場・牛乳搾取業を、25年に川越鉄道始める

川越鉄道は川越―国分寺を結び、東京へ生糸や物資を運ぶ手段となった。その後、飯能、秩父をつなぐため入間馬車鉄道も興す。

この農場（牧場）は、宗徳さんが尽力した鉄道が東京まで開通したおかげで発展できました。日本橋の問屋とつながりが出来て、都内のホテルに牛乳を届けることができるようになったからです。最盛期には200頭以上の乳牛を飼育し、埼玉県内で一番大きな酪農場になりました。戦中戦後も大変な時期がありましたが祖父は「オヤジ（宗徳）が始めたことだから、やらないわけにはいかんよな」といつも言っていました。入間川―飯能を結ぶ馬車鉄道に関しては宗徳さんは二代目社長として再建に尽力し、赤字を解消。しかし、武蔵野鉄道の開通で馬車鉄道は役目を終え解散しました。祖父の亡きあと、祖父はその馬車鉄道の線路敷地の一部を買い上げていたことがわかりました。馬車鉄道が解散するときに、少しでもその負債を減らそうとしたのだと思います。

私のような凡人には宗徳さんのような考えは思いもつきません。贅沢な暮らしをするわけでなく、負債を抱えてまで、地域の産業を興すことに資力と精力を注いだことはほんとに驚きます。祖父が12歳から宗徳さんにお世話になったこと、宗徳さんの牛乳搾乳業を引き継いで、戦前埼玉県で一番大きな牛乳工場になったこと。祖父は、昭和30年代に褒章され、私が大学生のころまで元気でした。

祖父が購入した宗徳さんゆかりの家で、私達６人姉弟が育ちました。今は私の妻が地域のひとが集う場として活用しており、せきれい停という愛称で20周年を迎えました。築150年以上の家ですが、屋根も軽い銅板に葺き替えました。まだまだ現役です。」

埼玉県で初めての牛乳搾取業は明治８年創業の熊谷の鯨井牛乳。創業者の鯨井治助は明治２年、横浜で蚕卵紙の輸出を始め、財を成したが、横浜の倉庫が火事に遭い大打撃を受け、横浜で外国人誰もが牛乳を飲むのを見て、牛を一頭熊谷に連れ帰り、牛乳搾乳業を始めた。生糸の輸出で横浜にも出かけていた清水宗徳は、明治18年に暢業社隣接地で牛乳搾乳業の「ジェルシー農園」を始めている。この農園を沼崎氏が買い取り、戦後、明治乳業狭山工場まで続いている。現在は明治乳業系列の食品加工工場になっている。

目の前の道路に馬車鉄道が走っていたという狭山市広瀬のせきれい停でお話しを伺いました。宗徳の後妻の清水波奈子さん（生家は川越の山中家）が住んでいた大きな家です。かつては広い土間があり、宗徳が最後まで行っていた入間川の砂利採掘の箱がたくさん積み上げられていたそうです。宗徳が起業した牛乳搾取業で成功した沼崎栄吉は、29歳のときに「清水宗徳翁小伝」を発行します。宗徳没後５年たち、栄吉より43歳年上の宗徳は父親のような存在だったのでしょう。また、赤字の馬車鉄道の再建のために、自分の給料を返上し尽力していた宗徳をみじかに見ていたのも栄吉でした。12歳から小僧で勤めた馬車鉄道の解散にあたり、宗徳が再建に苦労した会社の負債を減らすために沼崎氏が線路敷地を購入していた話には驚きました。

小伝に編者の古谷はこう記しています。

「翁の事業は、その時代より、10年も20年も早かった故、失敗に帰した。そうして、翁の後をたどって起こったものは、皆、成功している。それを見ても、失敗が即ち、先覚なる所以を立証すると言えるだろう。その失敗というのも、自営の事業についての名で、社会興業の上よりいえば、立派に功を奏しているのである。」

清水が創業した埼玉で初めての器械製糸工場は東京の米倉一平が引き継ぎ、所有者は変わったが昭和30年代まで撚糸、織物関連の工場が続いていました。また、生糸を横浜へ運ぶために宗徳が発起人となった川越鉄道は西武新宿線、国分寺線となり、狭山駅ができて地域は大きく発展しました。

今回の調査による新事実の発見

◆「明治新立志編」明治24年４月発行　鐘美堂刊　国会図書館蔵　にみる宗徳の履歴～前橋藩（川越藩）の郷兵だったことがわかった

明治24年４月に発行された「明治新立志編」は、この前年に行われた第１回衆議院議員総選挙に当選した約300人の議員の経歴を紹介するものである。埼玉県からは８名の議員が選出され、清水宗徳は47歳で自由党から埼玉２区で当選した。２区は定員２名で清水の他にはジャーナリスト、東京専門学校講師、後に早稲田大学の設立に関わる高田早苗が31歳でトップ当選をしている。その中から清水の紹介で注目に値する部分を紹介する。

「文久３年19歳にして父の職を継ぎ、里正となり慶応２年前橋藩主の命により武州松山の陣屋に於いて兵術を学び、農兵隊の隊長に挙げられ兵馬を事とする数年。明治２年藩政改革に際し、藩命により地方開拓勧業の事を督する。明治４年以降盛んに桑樹を移殖し、養蚕を勧奨し群民を利す。」

宗徳に関する資料は限られており、「狭山市史」「清水宗徳翁小伝」「川越市史」ぐらいであるが、その中では宗徳が幕末明治初期に前橋藩の農兵だった経歴を掲載しているものはなかった。「明治新立志編」は宗徳と前橋藩との新たな関わりを示す、初出の資料といえる。速水堅曹は前橋藩の郷兵取り立てを担当しており、兄の桑嶋新平も維新の時は藩命を受け、郷兵を組織し、藩中を警護した。明治２年（1869）11月民生局庶務拝命、馬医兼任となる。明治９年に前橋の研業社に伝習にいく清水であるが、前橋藩時代にすでに速水、桑嶋らと出会っていた可能性が推察される。

その他にも明治24年当時の、宗徳の人物評価が書かれている。
「地方実業家多し、しかし概して政治思想においては冷淡なるものがほとんどである。一方、地方政治家多し、しかし実業に従事するものは少なく、政治思想と実業との２つを有する者はなかなかいない。しかし清水宗徳氏は両方を合わせ持つ人物である。」
と記され、製糸工場、牧畜業、板紙製造工場、生糸直輸出の同伸社、埼玉生糸改良会社社長、などの実業が紹介されている。

◆清水宗徳の子孫・山口修司さんに聞く（2020年12月聞き取り調査）

山口修司さんは昭和14（1939）年生まれ・81歳　狭山市広瀬在。
清水家は宗徳の祖父の時代から苗字帯刀。宗徳が20代のころにお台場の警備に川越藩士と共に出かけ、その帰りにサムライの姿で撮った写真が残る。お台場の警備にサムライとして行ったということ、伊藤博文からの手紙が家にあったということが代々伝わっている。
山口氏からの聞き取りの結果、清水宗徳はお台場の警備にいっていたことが明らかになった。川越藩のお台場警備の後半は慶応２年から慶応３年であり、時期が一致する。この時期に、速水らと出会っていた可能性があることが子孫の聞き書きからも分かった。

◆川越藩農兵取立てについて

慶応２年の武州世直し一揆は、川越城下へも及んでいたが、辛うじて川越藩は大砲、鉄砲の配置で阻止できた。当時川越藩は江戸、川越、前橋、相州、と兵力の分散を余儀なくされていたため、川越城下の守りが手薄になった。そこで、川越藩は一揆鎮圧後に領内各村に対し、今後一揆への妥協を禁じるとともに、村役人、豪農層を中心とした各村の防御体制を作るように指示し、鉄砲の訓練などもおこなった。農兵取り立ては、藩の財政負担をかけず、領内の治安を維持することを意図したものといえる。
速水堅曹の日記によると慶応３年10月頃より、各地に浮浪の徒多く蜂起するため、郷兵取り立てを計画すると記載あり。また、同年11月の日記には、郷兵を取り立てて要害とするよう準備する。無給の有志を800名も集めることができ愉快である。と記されている。慶応４年、鳥羽伏見の戦いが始まった１月に、速水は郷兵取立てについて、掛りを兼務で命じられた（30歳当時）。前橋藩内で速水が郷兵の担当として関わっていたのである。速水と４歳年下の20代の清水宗徳との出会いは幕末の郷兵（農兵）時代にあった可能性がある。

参考資料

『川越市史第３巻近世編』　川越市　1983年
『速水堅曹資料集』　速水美智子編　文生書院　2014年